

加藤泰彦かとうやすひこは、困っていた。それも、かなり深刻に困っていた。もともと「困ったような顔をしているなあ」と、回りから言われ続けている。ただのだから、困っているのは当然のように思える。しかし、世の中は、そんな簡単な仕組みで動いている訳でもない。

泰彦の悩みのタネは、困っている事を「知られたくない」というところこそあった。だからいつも、話題と表情を明るく保っていたし、まわりのみんなも、困りごとなどないのだろうと、タカをくくつていて、泰彦に「困り顔の加藤」というお気楽な呼び名をつけたのだ。

でも、実際の泰彦の困り事は、誰にいう事も出来ない種類の「問題」だった。

泰彦の両親は、夜逃げをしていた。どこに逃げて隠れているかを、泰彦は知っていたが、その住所を明かす事は出来ない。手紙や電話での連絡も最小限にとどめておかなければ、借金取りに足取りを感じられてしまいかねないからだった。

だから、泰彦は困っている事を、誰にも言えなかったし、相談することもできなかつた。

「どごまんでもじよっぱってえ、自分がわがね。」

と、泰彦は家族と別行動を選んだ事を、少し悔やんだ。父の時彦から、夜逃げの話打ち明けられた時、「すたつて、この大学はやめられん。自分で働いてなんとかすつがら、とうちゃんが好きにしたらええべ。」と来産大に残る事を宣言したのだった。

父にすれば、自分の事業の失敗で息子に迷惑をかけてしまう事が申し訳なく、それ以上の事は何も言えなかつた。しかし、泰彦が、大学残るといふ事は、夜逃げの証拠を、一つ残して行く事でもある。泰彦は人に言えない秘密を背負って学生生活を送る事になった。

実際、泰彦には、大学に残りたいという判断に、大きな理由があった。彼が専攻している「倫理言語学」は、日本中どこを探しても、この、来栖産業大学にしか存在しない。

「倫理言語学」というのは、コミュニケーションをする、人と人との距離感を、文化圏ごとで異なる倫理規定とのからみで測定する学問だった。倫理を規定する言葉を基準値として、法的な処罰の重さや、何を価値観の上位に置いてあるかを測定し、意味としての翻訳ではなく「気持ち」としての言語伝達の共通項を図るといふ学問だった。

この独特の学問に関して、泰彦は特異な才能を發揮していた。もともと、高校時代に学校の図書館で読んだ山瀬穰太郎・著「村の掟が言葉を紡ぐ」という、エッセイ集とも学問書とも言えない書籍との出逢いが、この大学への入学動機であった。この本に強い衝撃を受けた泰彦は、どうしても山瀬の授業を受けたいと思った。幸い来産大の入学試験は、独自基準で行われており、特に倫理言語学の属する社会学部の入試は論文を面接を中心とした人物本位の入試制度であり、泰彦はなんなく入学、見事に山瀬教授に師事することになったのだ。

入学してからの泰彦の伸びは素晴らしかった。心理学のジョハリの窓に影響を受けた、異文化間での価値基準の「抜けた項目」をあぶり出す手法「山瀬の窓」を完成させたのも、泰彦の努力に負うところが大きい。

山瀬教授と泰彦との対話は、あらゆる文化間、言語間、価値観の比較対照手法を一定の基準で統合するもので、言わば倫理観の人類統一価値観を生み出すものと言って過言ではなかった。

実際の所、来産大の「来産語」を整えたのも、言わば泰彦なのだ。

来産産業大学の「唯一学部方針」に惹かれて全国から集まった学生の方言は、泰彦にとっては、かつこうの研究対象だった。倫理基準をあらわすキーワードを複数、それぞれの出身地の学生に「お国言葉」でどう使われるかを聞き取り、山瀬の窓でランク付けをしたあと、それにとりまなう文法変化を加えて、実用上の「気持ちのやりとり」に、どう活用すれば良いかのポイントを、各方言ごとに対照表として整理した。

この対照表を元にした会話が、短期間のうちに来産大近辺の学生マッシュンで広がったのは、なにより、その会話の仕方が、もつとも「気持ち」を伝えるのに効果的だったからだ。

そんな実績が作れた大学を、そう簡単に辞めることはできなかつた。家族の夜逃げが起きて以来、泰彦は、より一層、研究に没頭するようになつていった。そして、その分、一般科目の単位を落とすことが目立ちはじめたのだ。

「加藤くん。」と、語尾を伸ばすクセのある山瀬教授は泰彦に言った。

「ちよつとさあ、君、他の授業、受けて無さ過ぎだよ。僕もさ、いろいろなよろしく頼んでるんだけどね、ちよつとまずいよ。代返頼んでもいいからさ、とにかく出たことにしてよ。授業。悪いけど。」

「ええ、はあ、まあ。」と泰彦は所在なげに答える。

代返を頼んでも、と泰彦も思う。しかし、その代返を頼むこと自体を忘れてしまうのだった。いったい何故？ 夜逃げの話が出てからこ

うなったのか？ それとも、最近の事なのか？ 泰彦自身にも、「研究だけ」に打ち込んでしまう、自分自身の行動が良く理解できなかった。

このところ、悪い夢も良く見る。どんな夢かははっきりとは覚えていないのだが、誰かに追いかけていられているところだけは覚えている。確かどこかの宇宙人がやってきて「お前はお前のやるべき事だけをやっていけばいいのだ。」と、恐ろしい顔で迫るのだ。

なんだか、ぐっすり眠れず、気持ちも不安定だ。実際、すでに二度も進級しそこねて、この春で6回生になる。奨学金をもらって入学したのだが、それも4年で終わりだ。家族からの仕送りもない。袋詰めバイトは24時間いつでもできるが、夜の時間にやるしかない。わずかな金でなんとか生活を支えている。就職だって、こんな訳のわからない学問を活かせる職業があるとは思えない。この先を考えると、とんでもなく不安になってしまうのだ。

「でも、倫理統一理論が、もうちよつとで出来そうなんだよなあ、確かに。」と泰彦は思う。山瀬教授との共同研究で、泰彦にとっても自信の理論だ。もう少しサンプルがあれば、完成するはずなのだ。それだけが唯一の希望と言っても良かった。

「そうだ！ 旅に出よう。全国の方言の細部をもう少ししていねいに拾えば、統一理論の骨子が、かなり盤石になる！ そうだ！ それだ！」

袋詰めの作業をしている泰彦を、そんな、どうしようもない旅への衝動が襲ったのだ。「今日、バイトの金が入る。それを持って旅に出ればいいんだ。理論さえ完成すれば、どうにかなる。」そう心が決まると、袋詰めの作業も軽やかになった。何かがおかしいと無意識のどこかが叫んでいたが、それを無視して泰彦は自室に残す置き手紙の内容を考えはじめていた。

泰彦。あだ名はシンヒコ、またはチンヒコ。後輩からはチンさんと呼ばれている。

■ 2

ヤマさんこと青山良雄あおやまよしおは、加藤泰彦と同じく倫理言語学のゼミ生だった。良雄も泰彦と同じように倫理言語学という学問の可能性を強く感じていた人間の一人ではあったが、加藤泰彦のように、もともと興味と学問の方向性が一致していたわけではなかった。

もともと良雄には吃音のクセがあったのだ。そのクセを矯正してくれたのが山瀬教授のもとで倫理言語学を学んだカウンセラーだったのである。そのカウンセラーから倫理言語学のすばらしさを伝えられ、その考え方に沿ったカウンセリングによって吃音を矯正できた。そん

な個人的な「救い」としての感動が良雄の「学問を学びたい」という欲求につながっていたといえる。

もともと良雄は、小学校の頃から、自分の事を半分も周りに伝えることができなかった。何か大切なことを言おうとすると、どうしてもうまく話せない自分がかたじけなく、また、その事を同級生たちからかわれることが、たまらなく嫌だった。

「ち、ち、ち、地球が、じ、じ、じ、じてん、してるんなら、わ、わ、わ、わ、わ」と、自分が気づいたことを小学生の同級生に伝えようとしたことがあった。

「どげえした？ ドモヤマがあ、なんか言おうとしとるけん。」「なにいつちようだ？」と、同級生たちが面白がって近づいて来てしまった。

「ちち、地球が自転しとるなら、わわ、わしらは、も、も、ものすごい速いけん。」と良雄は、精一杯の説明をしようとした。クラスの悪ガキたちが数人、ドモヤマこと良雄の周りを囲んだ。

地球の円周は40073km。それだけの距離を、たった24時間で一周する。であるならば、地球上の人間も、建物も、山も、川も、すべてが時速1669kmという超・猛スピードで移動していると言うことになる。

そういう事を、良雄はどもりながら、つかえつつかえ、それでも誠実に、クラスメイト達に伝えようとしていた。

「ドモヤンが言うのは、つまり、こういう事かの？」と、クラスの情報伝達係、ハタビンこと畑山貴男が要約した。

「地球はものすごく大きいのに、一日で一周するけん、わしらはジェット機より速く、すっ飛んでるっちゅうんやな。」

「そそそそ、そ、」

そう！と、良雄が言おうとしながら「そ」としか言っていないなかったときに、クラスの学級委員をしていた、カタケツこと、片上潔が、大きな目をむいて「だらず！ そげなことはありやせんかわ。」と、強く否定を始めた。

「学校も、山も、川も、全然動いてないだわ。わしも、ここでちゃんと立っとなるけん。ウソついたらいかんけん。」

カタケツは、がんとして「猛スピードでの移動」について否定した。

「そげな、おかしなことは起こつとらんわ。青山は嘘つきじゃ。」と、怒り口調で怒鳴りつける。

「青山は嘘つきじゃ」と誰かが同調して声にすると、もう、流れは決まってしまった。

ドモヤンは吃る上に、おかしな事ばかり言う奴と、カタケツに決めつけられ、以後、何を言おうが、クラス内での発言権は無いに等しく

なった。それ以来、良雄の吃音はより一層ひどくなり、発言する機会自体が大きく減ってしまったのだ。

その強固に歪められてしまった吃音も、今では、倫理言語学による自発運動療法によって、ほぼ全快したと言って良い。話すスピードが少し遅い程度だ。それとて、「ヤマさんはいつも落ち着いてるよね」という、高評価になっていくほどだ。

しかし、ある大手企業に就職が決まった三週間ほど前から、どうにも何度も小学生時代の、一番辛かった時期の夢を見るようになってしまい、良雄はどうにも落ち着かなくなって来た。

確かに、来産大では自分の意見をキチンと受け止めてくれるゼミの仲間や、良き後輩たちもいる。自分が伝えたい事を「理解しよう」としてくれる環境が整っているのだ。

しかし、就職先の企業では、そういうまわりに頼った生き方、動き方は出来ないだろう。たとえ、周りから奇想天外に思われても、自らの言葉で企画を通していかなければならない。

そう考えると、良雄は、かなり不安になった。広い世間に出てしまえば、来産語という、良きクッションとなる「道具」も奪われてしまうのだ。

そう言えば、と良雄は思う。就職が決まってから、何故か何度も、夢の中に、あの意地の悪い、「学級委員カタケツ」が登場している。

「お前は嘘つきじゃ。」と、真っ赤な顔をして、良雄を睨みつける。その後ろには、教室の同級生たちがいて、その同級生の後ろには、何千何万もの「社会人」がいた。

「お前は嘘つきじゃ。」と、その全員が、小さくつぶやいていた。無秩序につぶやく声は、さざ波のように、良雄を苦しめた。

「お前は嘘つきじゃ」

眠るたびに、カタケツの声は大きくなり、眠る良雄の目の前に、カタケツが顔を突きつけて怒鳴っている気にすらなった。それは、あまりにリアルで、怒鳴り声が起きていても聞こえるような気がした。

ちゃんと、しゃべれるだろうか？ 社会に出てまともにやって行けるのだろうか？ 毎日に良雄の不安は大きくなって行った。

「就職したら、地元に戻るんだし、もう、とっくりの仲間にも会えなくなるなあ。」

そう思うと、良雄の不安は頂点に達していた。

「モウ、アエナイ。」そんな言葉が頭に鳴り響いた気がした。

「アタラシイ、ナカマガイル。」頭の中の声は、そう続けて話しかけて来た。

え？

あ、そうか！

と、良雄は気付いた。

「仲間が要るんだ。ずっと一緒に居られる。そういう仲間が。」
 そう「気付く」と、良雄はテールブルの上に積み上げられた、チラシや雑誌の山をかきわけ、一枚の申込書を探し出した。

「あった。これだ。」
 間に挟まっていたのは、ある新興宗教の集会の案内だった。知り合いから、無理矢理手渡されたものだったが、妙に気持ちに引っかかりがあつて、捨てずにいたのだ。

驚くべき事に、良雄がその宗教団体に、わずかな全財産を寄付して、施設に身を預けるようになるまで、それから三週間もかからなかった。

■ 3

木下政次きのしたせいじは、もともと直感が鋭かった。子どもの頃から、親戚が病院で亡くなつた時に「いまおじさんが行っちゃったよ。」と唐突に言葉にしたり、他の人には見えない「何か」を見ることが多かった。来産大に入ってから、男か女かはわからないが、宇宙人とか思えないような存在を闇夜にボウッと感じ取ったりしたこともある。

その能力は、つねに発揮されるといふわけではなく、時折、思い出したように発現するのだった。中学校の修学旅行で、ふと覗いた清掃中の部屋が妙に気になり、その後、その地元新聞を見たら、その部屋で自殺者が出たらしいと知つた事。

高校時代の友人の制服がほころびていて、どうしてもそれが気になり一日中眺めていた、その日。その友人は柔道の部活で、まさにそのほころびのあつた右腕を骨折してしまつた事。

いや、もつと小さな不思議な偶然を、政次はいくつも、いくつも体験していた。そしてそのどれもが、「不思議」と言えば不思議だが、だからと言つて、明確に霊能力だとか、予知能力だとかは口が裂けても言えない程度の、ささいな出来事ばかりだった。

でも、だからこそ、政次は、この自分の不思議な力について、もつと知りたいと思つた。どの出来事を取ってみても、それぞれは不思議な偶然としか言いようがない。他人から見れば、本当にどうでもいいような「偶然」ばかりだったのだが、本人にとつては、人生のうちで、何度も何度も起きる気になつて仕方ない出来事だつたのだ。

「おそらく、これは偶然ではない。なら、これは一体、どういう力なのだろう？」

そういう、どうにも押しとどめようのない興味が政次の無意識下には、存在していた。

そんな政次の興味を大きく高めたのが、高校の進路指導室に置かれ

ていた、来栖産業大学の「唯一学部紹介パンフレット」であった。
 「直感予知工学」
 と、そのパンフレットの7頁目には、大きく文字が刷られていた。
 いわく、

「予測不能な事象に対し、必然性を見いだす論理性や、ゆるやかな推測を含む蓋然性などのプロセスを経ずに、直接予知し、その予知に基づいた効果的対策を、短時間で工場生産など、工学的に実行できる環境に施して構築する学問です。」

ほう。

「研究の実際としては、仮説の構築と、その仮説の欠陥を追求する批判構築との限らない繰り返しを行うことが基本であり、そのAI-Hypermechanical Theoryによる実脳波検出分析と、その思考波を機械化するための人工知能技術とで成立しています。」

へえ。

「人間が行なう事のできる正しい選択、あるいは人間が判断するプロセスを、無意識レベルまで再検証し、汎用性に耐える仮説と理論を構築した上で、電子計算機上で再構築。その判断予測によって多様な工学機器を多彩に開発・運用します。人間の直感を工学的に解明する事が目的です。」

おお。

「これだ！」と、まさに、政次は、「直感」した。

自分の求めていた世界が、ここにあると直感したのだった。政次には、自分の能力は、決して特殊な「個性」ではないと思っていた。物事の気づき方を、より洗練させれば、この種の能力は、汎用的に誰にでも使えるようになるものだと思えて仕方なかったのだった。

逆に言えば、予知や占いを「怪しげなもの」として、科学とは別枠に押し込めてしまおうとするきまじめさや、そうでなければ、一気に特権的オカルト的能力として一部の「霊能者のもの」としてしまいう軽薄さの、どちらにもなじめずにいた、ということでもあった。

しかし、「直感予知工学」の説明では、論理性を経ずに最適な結論を得る手法を「工学」として確立しようとしていたのだった。その発

想が政次にはとても興味深かったのである。この直感予知工学なら、自分の能力の可能性を追求できるのではないか？ と政次は大きな期待を抱いて来産大に入学した。

「直感予知工学」を創出した広田教授は、政次が想像していたよりはるかに、人間の「直感」や「予知能力」というものを、疑うことなく肯定した上での方法論を考え出していた。人間観察による行動予測や、さまざまな「虫の知らせ」が、いかに人間に直接的に認知可能であるかを、膨大な事例収集とともに整理・分類されたケーススタディとして積み上げていた。

そして、その、いくつかの理論は、すでに実用の範疇へと入り、その理論を使えば、かなりの確率で、人間の次の行動が予測できるようになっていたのだ。

環境の変化定数を定め、その影響を考慮しながら、クラスメイトの表情変化と行動変化の度合いを、内面心理チャートにあてはめて数値化し、「ヒロタフォーミュラ」と呼ばれる公式をもとに、簡単な暗算をすれば、友人が「えーっと、どうしようっかなあ。」とつぶやいた後の行動を、9割5分以上の確率で予測可能であった。

もともと、直感の鋭かった政次にとって、この「ヒロタフォーミュラ」は、必然と蓋然と偶然のすべてを操る、魔法の公式を手に入れたようなものだった。社会動向や、世界政治といった社会的な環境動向から、友人の恋の悩みという個人的な事柄まで、あらゆる出来事にその法則は当てはめられた。

政次自身は、この「実験」が、特定の法則と、自分の直感の組み合わせで行われているのだと言うことは、誰にも言っただけではなかった。先入観を与えずに予測できなければ、正確な中率を捕捉できない。政次にとっては、あくまで研究の一環だったのだ。

しかし、恋愛に想いを傾けがちな同世代の友人たちはそんな事情は想定せず、ただひたすら「女の気持ちわかる稀有な奴」という、絶大な信頼を置くにいった。

好きな彼女が振り向いてくれるかどうか、プレゼントを贈るなら花束がいいのか、指輪がいいのか。ことごとく政次のアドバイスが功を奏し、相談相手として高い評価を得ていた。

「まさか、花束持ってくつもり？ 君の彼女になら、指輪の方がいいよ。」

「なんで？ だってお前、俺の彼女なんて、一回チラッと顔を合わせただ程度じゃん？」

「いや、何度も話を聞いてるからさ、ま、勘でなんとなく分かるんだよ。」

「そうか？ うーん、お前が言うならそうするか。」
と、忠告を受けた者は、取りあえずは政次の言う通りにするよう

なっていた。

「まさか、お前、そうするつもり？」

「まさか、君、そっちへ行くつもり？」

「まさか、ジュンくん、ヨッコに迫るつもり？」

政次の「まさか」は、友人からは、ドキッとする忠告になっていた。いつものまにか政次は、「まさかの木下」というあだ名までつけられていた。

しかし、ある時、この素晴らしい「ヒロタフォーミュラ」を、公式を生み出した広田教授自身にあてはめて見た時、政次は、愕然とすることになった。広田教授のこれからの人生についての、ヒロタフォーミュラの答えは、

「決して報われない」。だった。

何度、変数を入れ替えて予測してみても、恩師、広田榮一郎教授は学会から認められずに、一生を終えるという判定しか出てこないのだった。

どうしてそんな判定結果しか出てこないのか、政次には、おぼろげながら予測がついていた。それはつまり、政次の「直感」とひとつになつてはじめてヒロタフォーミュラは絶大な効果を発揮するのであつて、フォーミュラ公式のみで実用性を獲得するのは無理ということなのだ。

——ヒロタフォーミュラは、自分の直感とひとつになつてはじめて、実用性を得られる。

その仮説は、政次の思考を完全に乗っ取ってしまった。「僕の直感と広田の公式を物理的に結びつけられれば、人類は予知という新たな世界を自在にあやつれるようになる。」それこそが、ヒロタフォーミュラと自分が出会った意味ではないのか？ その意義を形にした。そして、この偉大なる公式を生み出した広田先生を、世界のヒロタとして、知らしめたい。そんな思いで政次の頭は一杯になっていた。

「こうなったら、未完成だけど、サイコスキヤナーの実験台になるしかないじゃないか。」と、政次は思うようになった。

人間の思考パターンそのものを、サンプリングする『サイコスキヤナー』は、脳波を直接脳内から認識するために、脳に大きな電気的負荷をかける、危険な機械だった。まだセンサの精度が整わず、それゆえに、脳への電気的負荷を大きくするしかない状態で、人間に使うにはリスクが大き過ぎた。

しかし、政次には、そんなリスクは、小さなことにしか思えなかった。ある夜、政次は、学内の実験室に忍び込み、自らを実験台としたサイコスキヤンをはじめることにしたのだった。

コメカミや頭頂など、頭の24箇所に着電極を正確に貼り付け、ス

キヤニングスタートボタンを手に握ると、政次は電子計算機の起動を行い、ベッドに横たわり、ニードル型電極を自分の脊髄に注射のように差し込むネックセンサーを首にまいた。スイッチを入れると局部麻酔をしていくというのに、少し鈍い痛みが頭の後ろ側に走った。脳内に電流が流れ、政次の意識は遠のいた。

あらゆるイメージと、論理が、数式と言葉になって頭の中を行き来し、リズムと色彩が政次の五感を前後不覚なものにした。

何人もの知り合いが自分に語りかけ、政次の人生そのものが再生されて、次々に電気信号として増幅されデータとして収集されて行く。

と、そんなイメージの奔流の中で、いつだったか出会った、あの男か女かわからない宇宙人のようなイメージが、政次のそばまで迫ってきて語りかけた。

「あなたは、こんな事をして、神にでもなろうとしているのですか？」

宇宙人の言葉は政次を、いや、人類の挑戦をなじっているように感じた。政次は、無意識の中で首を横に振った。

「ふふん。いいでしょう。でも、いくらあなたが、未来を予知しようとも、その未来が存在しないとすれば、何の意味もないとは思いませんか？」と、宇宙人は意外な質問を投げかけてきた。

「未来がない？」そんな想定はしていなかった。未来がない、だと？ そんな馬鹿な。政次がそう考えるのと同時に、宇宙人は言った。

「そんな馬鹿な、と言いたいのでしょう？ でも、そんな馬鹿なことが、すでに宇宙の果てでは起きていますよ。あの立方秀美とかいう人間と、あなたが、仲間意識で結ばれている限りね。宇宙は救われないのですよ。あなたが仲間にいる限り、立方秀美は救世主になるという決断をしない。それだけは確かな事なのです。」

タツちゃんが救世主？ なんの事だ？ と政次は思う。しかし、すでにサイコスキャンは始まっていて、中断することもできなかった。

「だから。」と宇宙人は政次に言った。「この実験には失敗してもらいますよ。」というのと、宇宙人は、その長い人差し指を政次の意識の中心にグイッと差し込み、指から白い光を放った。

「ウギヤー」という叫び声が、実験室に響き、政次は気を失った。以降、木下政次こと「まさかの木下」、マサさんは、精神病院に入院することになった。

■ 4

特急列車は、そろそろ出発の時刻だった。

「結局、マサさんにも連絡取れなかったんだ。」と、タツちゃんは駅

まで走って来たらしいジュンくんに言った。

「はあつ、はあつ、あそこの、学部まで、行ったんやけんど、実験設備の故障ちゃあ、あつたらしいてなああ、はあつ、みんなドタバタしとうやから、それ以上は、はつ、わからんかったちゃ。」とジュンくんは息を切らしながら報告した。

「そつかあ。チンさんは旅に出ちゃったし、ヤマさんはあんなことになつちやったし。見送り、少なくなつちやったね。」

「いいわよ。みんなが集まらなくても。別にこの世の別れってわけじゃないんだから。」と、列車の中からヨッコが答えた。

「はつ、はつ、そらま、そやわな。結婚して、よその土地に嫁ぐつちゆう話やけん。おめでたい話ちゃ。ふう、湿っぽいのはおかしかね。」

ジュンくんは、息を切らしながら、それでも、いつものからかうような口調で言った。

「そうよ。湿っぽいのは嫌よ。」とヨッコはジュンくんを見ながら答える。

「でも、いつもの仲間がいないのは、なんだか落ち着かないね。」と、タツちゃん達は2人が2人だけにしか分らないやり取りをしているとは全く気付かず、自分の寂しさだけが気になっていた。

と、その時、列車の発車のアナウンスがあった。

「じゃ、いくね。」

「うん、幸せにね。」

「りっぱに、旦那を尻に敷きなんせ。」

「うるさいわね。」

「それじゃねー。」

「元気でねー。」

「しっかりなー。」

列車は、あつという間に小さく、そして見えなくなってしまった。

「結局、僕とジュンくんだけだったね。見送りができたのは。」と、タツちゃんは隣でタバコに火をつけた、ジュンくんは声をかけた。

「まあ、見送りはわしら2人がちょうど良かったんやちゃ。」

「え、どういうこと？」

「そのぶんー、ゆっくり話せるんやちゃ。ヨッコにも良かったわね。」

意味が解らずに不思議そうな顔をしているタツちゃんを見て、「この鈍感が」と思いながら、でも、そういうところが、ヨッコには良かったのだらうなど、ジュンくんは納得した。

「それよりな、」と、タツちゃんに気付かせない様に急いで話題を変える。「ワシも行かなあかんちゃや。」

「え？ ジュンくんも、どこか行くの？」
 「ああ、チンさんみとおに、旅にでもでるがや。」
 「なんで？」

「失恋したからじゃ。」

「えっ？ ジュンくんが？」

「そうがじゃ。」

「誰に？ ……って、あ、まさか、ヨッコさんに？」

「どうでもヨカ。そんなこつ。ホンマはのう、実家の家業を継がならんようになつたがや。」

「ん？ ……って、多野上製薬？」

ジュンくんは「そうだ」と言うようにゆっくりうなづいてから、言葉をつなげた。

「親父が入院した。社内がいろいろ荒れててな。親父の右腕が、帰って来てくれと、かなりうるさい。」

「そうなんだ。」

その夜、多野上潤一郎も、故郷へと帰った。
 タツちゃんは本当に一人になった。

■ 5

孤酔亭コヨウテイは、とつくりが閉まつてから、タツちゃんが良く行くようになった飲み屋だった。

無口なヒゲのマスターがいて、何も言わずに客の相手をする。だまつて話を聞くだけだ。

「結局さあ、みんななくなっちゃったんだよ。」

と、タツちゃんが愚痴を言っても、マスターは何も言わなかった。ただ静かに微笑み返すだけだ。その微笑み方が、タツちゃんには、妙に懐かしい感じがした。

タツちゃんは、マスターをじつと見つめると、聞いた。
 「ねえ、マスターと、どこかで会ったことあつたっけ？」

「そう言われると、マスターは、ビックリしたような顔をして、
 「そ、そんなことはないと思いますけどね。」と、答えた。

じつとマスターの顔を見ていたタツちゃんは、そのマスターの顔が、何となく、あの宙公に似ているのだと気付いた。
 「あつ、そうか、宙公か。わかった。もういい。」

「どなたかお知り合いに、私に似た方でもおられましたか？」
 「うん。遠い…。遠い国に住んでる友達にね。」

「遠い国ですか。その国が幸せだったら良いですね。」
 と、珍しくマスターが話しの端を継いだ。

「幸せかどうかはわからないけど、いろいろ大変みたいだよ。」

「どんな風に変ななのですか？」

「なんていうかさ、この世の終わりって言うか、破滅って言うか、なんかそんな感じだよ。」

と、タツちゃんは、少し話をごまかした。そのまま僕が救世主になり損ねたんだ、などと説明しても、頭がおかしいと思われただけだ。

「友達が破滅しかけていいるというなら、それは助けて差し上げた方がよろしいのではないですか？」

「え？ いや、まあ、そうだけどさ。」

「あなたのお友達は、あなたを、救世主のように思ってたとか、そういう事だったんじゃないですか？」

「なんだか、話が合い過ぎる。おかしい。とは、思ったが、すでにタツちゃんはかなり飲んでいて、意識がはつきりしなかった。」

「そんなこと言ったって、僕は救世主になんかなれるわけがないじゃないか。」

タツちゃんは、意識が遠くなりつつあったが、とにかく、答えることにした。答えなければいけないかのようには。

「それは、あなたが、救世主になるのを拒んだというだけの話なのではないですか。」

「つまり、あなたのおがままで、破滅を止めなかったということですね？ それは。」

「そんなことはない、と、思う…。」

タツちゃんは、だんだん自信がなくなってきた。確かに、友達を助けてあげるような気持ちを持っていれば、もしかしたらスエンの「金色の御光」を浴びた時に「救世主」とやらになれていたのかもしれない

いとも思う。自分の人生なんて、たかがしれているのかもしれないし、自分がこの宇宙全体を救えるというのなら、それだけでも価値のあることだろう。なんとと言っても全宇宙だ、とんでもない数の命を救

う事にもなる。だいたい、何より、あの宙公の使命を果たしてやる事が出来る。あいつはいい奴なんだし、宇宙の運命の事などよくわから

ないけれど、見知った友人の役に立つなら、それは願ったり叶ったりというものだとも思うのだった。

と、マスターの顔を見ると、それは本当に、あの宙公にそっくりの顔に見えた。

「宙、公？」

タツちゃんはもう、現実と夢との区別がつかなくなってきた。マスターが宙公なのか、それとも、単なる自分の幻想なのか。

「あなたのお友達も、みなさん、自分の道を進まれたのですよ。あなたも、あなたの道を進まれるのが良いのではないですか？」

と、宙公そっくりの顔をしたマスターが人差し指をタツちゃんの才

デコの方へと伸ばしてきた。

「みんなが、自分の道を？ なら、僕の道は、救世主なのかなあ。」

「そうですよ、あなたの一番の使命は、宇宙を救う事です。」

宙公顔のマスターの指先はほのかに光り、ゆっくりとタツちゃんの頭の中へと入り始めた。

「そうか。自分の道、だね…。」

と、その時、孤酔亭のドアがガタガタガタつと、大きな音を立てて開き、誰かが店に入ってきた。

「だまされたら、アカンで、タツちゃん！ 自分の意識はしっかり保つがや！」

それはまさに、「本物」の宙公だった。

「宙公が2人？ いや、でも…」

と言いながらも、マスターが偽物で、いま入ってきた宙公が本物だと、タツちゃんには気づいていた。なにより、「本物」は、どうやら、傷だらけのようなのだ。

「どうしたの？ その怪我。」とタツちゃんが聞こうとした時、「偽物」の宙公が叫んだ。

「先輩！ どうしてあなたがイニシエーションの邪魔をするんですか。やつとここまで、この地球人を一人に出来たと言うのに。あなたまで『ガーディアン』になるなんて、そんな、ひどい。」と、「偽物」はガツクリと肩を落とした。

「ど、どういう事だよ、宙公。」と、タツちゃんは宙公に答えを求めた。しかし、それに答えたのは、「偽物」のほうだった。

「立方秀美さん。あなたがスアミイ族の救世主転換儀式に成功しなかったというニュースは、全宇宙にとどろき渡る悪い知らせでした。

何千年にも渡って、宇宙人全てが期待をかけていた希望が、一瞬で消え去ってしまったというニュースなのです。」

「そ、そんな事言われても…。救世主に不適合だったんだからしょうがないじゃないか。」

「ええ、最初は、そう結論されました。だから、グウアリレンの総督府でも、事実を静かに受け入れようと言う結論になったのです。もう、滅びを受け容れるしかないだろうと。」

「偽物」の顔は、タツちゃんには、とても恨みがましく見えた。

「しかし、全宇宙の民がそんなことで納得するとあなたは思いますか。自分の命がなくなるだけなら、あきらめもつきましよう。しかし、

そうではない、自分たちの子孫も生まれず未来もなくなるということなのですよ？ 誰かに託す相手すらいらない、絶対の虚無だけしかない。そんな未来だけは、どうしても嫌だ。だから、」

「だからつちゆうて、タツちゃんの友達連中の未来まで奪う権利はわ

しらにはないがやろうが！」

と、横から本物の宙公が、割って入って来た。

「僕の友達って、どういうこと？」タツちゃんは、急に不安になって来た。

「洗脳ばい。宇宙からの意識通信で、タツちゃんの友達連中を、みんなタツちゃんから引き離したんばい。」

「なんだって！」

「そうです。あなたは、なぜか周りの人間に守られるようになってるようなのです。スアミイの予言にも『救い主は守護者の壁に守られ眠る』となっていましたからね。その守護者の壁を壊さなければ、救世主として目覚めないのではないかという懸念は前からあったのです。スアミイの中心、スエン様ですら、あなたの守護者の壁は破れなかった。」

「どういうこと？」

「ヨッコさんの事ばい。スエン様の洗脳の夢の中、木曾中つちゆう嘘んこ教授の授業にも、変な工場にもヨッコさんが出てきたろうが。だいたい、わしの最初のサイコワープも、とつくりの人らの意識が混じって失敗したとよ。」と宙公が解説をした。

「えええ、そ、そういう事だったの？」とタツちゃんは、みんなの守りの壁の厚さに驚いた。

「守る者を引き離せば救世主は目覚める。それが『守護者の壁』ガイア・ディアンウォール仮説』です。もちろん、強制的な洗脳は、グウアリイレンでも禁止されている。他の星の個体の自由を制限してしまうことになりまますからね。しかし、話は全宇宙の救いの問題です。だから洗脳はまずくても、少しの刺激を与える程度なら良いのではないか？ という事になったのです。その個体がもともと持っている問題意識を少し刺激して、あなたから離れて行く方向への決断をしてもらうようにした。」

「どういうことだよ。」

と、話の概略が見えてきたタツちゃんは、低い声で聞いた。

「それは、僕の友達の人生をねじ曲げたって事？」

「ねじ曲げたのではありません。進むべき方向に、少し後押しをしてあげただけです。」

「後押ししてくれて頼まれたわけでもないんだろ？ どういうことだよ。それ。」

みんなが、そんなに僕を大切にしてくれていたのに、それに気づくこともできなかつた。なのに、僕のせいで、みんなの人生が歪んでしまった。あまりにひどいじゃないか。そう思うと、タツちゃんは急に偽宙公に怒りが湧き、思わず拳を固く握りしめた。

「悪く思わないでください。これは、全宇宙の代議員達から同意を得

た、順法行為なのですから。」

「何が順法だよ、この野郎！勝手な事を言うんじやないよ。」

と、言うが早いのか、タツちゃんは偽宙公に飛びかかって行った。

大きく振りかぶって、タツちゃんの拳は、偽宙公の顔の中心に突き刺さった。

が、タツちゃんには何の衝撃もなく、拳は虚空を通り抜け、単なる空振りになってしまった。

「申し訳ありませんね。こちらは、グウアリエレンの意識通信室にいるもので。チャアウクオウル先輩がやってみたみたい、ハーレンシー波でも浴びない限り、物理接触は出来ませんのでね。さて、グエラ大王さまになんと報告したのか……。もう、打つ手は何も、何も無い。衛兵！チャアウクオウル先輩を独房にお戻ししなさい。この妨害は、あまりに罪が大きいですよ。」

と、見えない空間から、異形の腕が現れて、本物の宙公の体をつかみ上げ、崩れ落ちていた宙公を引き起こし、どこかに連れ去っていった。

「宙公！」とタツちゃんは声を限りに叫んだが、すでに宙公は、ほとんど意識を失っているようだった。

「それでは、私は、失礼をいたします。」

と慇懃に偽宙公があいさつをして、姿を消した。それとともに、いままでタツちゃんがいた「孤醉亭」も消えてなくなり、そこは飲み屋街の小さなビルとビルの間、雑草が生えた空き地になっていた。

「どういうことだよ、どういう事だよ……。」

宇宙という、あまりに大きな世界の力の前では、親しい友達を、その人らしく、そつと過ごさせてあげる事すらできない。それだけでもタツちゃんにはヒドイ話に思えた。なのに、そのヒドイ話の原因が自分にあったなんて。僕が自分らしくしていたことが、大事な友達の人をゆがめていたなんて。なんでこんな理不尽な事が起きてるんだ。タツちゃんは泣きながらその場に崩れ落ち、地面に拳を叩きつけていた。